

はじめに

6月24日の民放で放映された「夢の扉+」という番組に建築家の今川憲英先生がドリームメーカーとして登場した。数年前、友人の紹介でお会いしてから、尾道の町造りの話や、建築構造物などのニュービジョンに興味深く聞かせていただいている尾道出身の先生である。

先生は現在東京電機大学未来科学部の教授で、国内の高度成長期に造られた建物の多くが寿命をむかえようとしている現状の中、建物を解体するだけではなく、再生、延命という『外科医的建築法』を実践し、世界からも注目を集められている建築家である。はじめて名刺をいただいた時、『外科医的建築家』と肩書きに書いてあったのが強烈な印象に残る先生であった。

今回の放映では、まず建物の耐震構造などの強度を計算して設計、デザインを行う、番組はその事例の紹介からはじまった。今から20年前、横浜赤レンガ倉庫は解体の危機に瀕していた。外観はそのままに建造物の強度を上げ延命させたのだ、しかもレンガを積み上げてできた建物の強度を上げる難易度の高い建造物であった。レンガが積み上げられた部分の目地や亀裂に硬化剤をいれるのはもちろんのこと、その柱に計算された角度の穴をあけ構造補強するプロセスが映し出された。そして50年延命させることに成功したのだ。その他にも、耐震壁を1枚設置しただけで、震度7の地震にもたえられる“外科医的処置”で幼稚園の建物が救われた。その話を語る園長先生などが登場してその強度が証明されたりした。また再生だけでなく地震に強い長寿命の建物も数多く手がけられており、岩手県大船渡市に建てられた大船渡市民文化会館も東日本大震災のあとその現場にその会館だけが残っている光景をテレビなどの映像で見た方も多いと思う。

そんな建築ドクターが現在挑んでいるのは、「未来のコンクリート」。珪砂を使ったまったく新しい構造材の開発である。実験を繰り返しながら7年、コンクリートの2倍の強度を誇り、しかも二酸化炭素を吸収してくれる新素材「CO2エコストラクチャー」が生まれた。

これを、東日本大震災の被災地で役立てようと、耐震強度実験の試みとして南三陸に「長寿命の住宅」を建てる、そのプロジェクトがスタートした。その後、「CO2エコストラクチャー」の強度実験の結果は大成功、コンクリートの2倍どころの強度ではなかった。いつか故郷の尾道にも今川先生の再生、延命した建造物が登場することを待ち望んでいる。

尾道市立大学地域総合センター長

稲田 全示

目 次

はじめに	稲田 全示	1
いい町って、こんな町だとボクは思う	小川 長	3
徳川期尾道地域における手工業の発展構造	勝矢 倫生	13
地域とデザイン	高岡 陽	45
尾道をめぐる/物語——地図、パンプセスト、聖地巡礼	小畑 拓也	53
高垣眸作品研究序説	藤沢 毅	71
付・2011年度尾道学講座紹介		73
執筆者紹介		75